

団地再生 医療の視点で

■ 宗像市日の里地区 ■

看護学生が住民聞き取り調査



日の里地区の地図を見ながら買い物場所や医療機関の立地などを住民に確認する学生たち

昭和40年代にベッドタウンとして開発され、現在は高齢化が進む宗像市日の里地区を27日、日本赤十字九州国際看護大（同市）の学生が訪れ、住民を対象に聞き取り調査を始めた。医療看護の視点から課題点を洗

い出し、団地の再生に向けた提案につなげる。日の里地区は市平均よりも高齢化率が高く、独居世帯も増えていることから昨年、市と都市再生機構（UR）、大学、医療機関などが連携して地域医療を考え

る協議会を設立した。同大は住み慣れた地域で最後まで暮らせるシステム構築を目指しており、この日は学生5人と教員3人が同地区の「コミュニティ・センター」を訪れた。

学生たちは日の里地区の買い物場所、医療施設、交通網など事前に調査した基礎データを書き込んだ地図を披露し、住民に見てもらいながら話を聞いた。住民たちは「当時30代だった移住者がいま70代になり、地域が一斉に高齢化している」「5階建て団地にエレベーターがないため、4階より上の階の空き室が増えている」などと実情を明かし、学生たちは熱心にメモを取っていた。

聞き取りを元に実地調査

の場所を決め、来週は住民と一緒に歩きながら写真取材をする予定。

（今井知可子）